

報告

高等教育改革の相互行為分析 —ビデオ・エスノグラフィー研究の狙いと工学部都市工学演習の実際—

榎田美雄¹⁾、岡田光弘²⁾、五十嵐素子³⁾、宮崎彩子⁴⁾、出口寛文⁴⁾、真鍋陸太郎⁵⁾、藤崎和彦⁶⁾、北村隆憲⁷⁾、高山智子⁸⁾、太田能⁹⁾、玉置俊晃¹⁾、寺嶋吉保¹⁾、阿部智恵子¹⁰⁾、島田昭仁⁵⁾、小泉秀樹⁵⁾

(1)徳島大学、(2)国際基督教大学、(3)光陵女子短期大学、(4)大阪医科大学、(5)東京大学、
(6)岐阜大学、(7)東海大学、(8)国立がんセンター、(9)神戸大学、(10)石川県立看護大学

要約：ビデオエスノグラフィーは、当事者の知識を十分に摂取しながら行うビデオ分析であり、我々はこの方法で、高等教育改革の現場を研究した。生涯学習社会の到来を受けて、日本の高等教育は現在第2次世界大戦直後以来の改革期にある。すなわち、「知識」より「生涯学習能力」の獲得を志向した、自発性を尊重するような様々な取り組みがなされ始めている。この高等教育の現場に対し、ワークプレイス研究を行った。B大学工学部都市工学演習α班を分析対象とした調査の結果、①演習の課題解釈には「従来の指標の相対化の要求の程度」を巡って2つの解釈があり得たこと、②班内にはその2種類の解釈に対応した葛藤・対立的相互行為が存在したこと、③にもかかわらず、班内葛藤を生きる当事者がともに専門性（「都市工学」）を志向していたこと、④したがって、課題理解のいかんにかかわらず、班活動の全体が「都市工学演習」と呼び得るものになっていたこと、⑤その一方で、最終審査会場（ジュリー）ではこの2重性が十分レリバントなものとして浮かび上がって来ていなかったこと、これらのことがわかった。諸結果を総合すると、学生の自主的活動を尊重するタイプの、新しい学習方法の吟味・評価のためには、学生によるその方法の実践状況の分析が有意義であるだろうこと、また、それは、場合によっては教員の評価のパラダイムを変える力を持つだろうことなどが予測された。なお、本報告は、文科省科学研究費補助金「高等教育改革のコミュニケーション分析—現場における文化変容の質的検討—」（基盤研究（B）、課題番号 18330105、研究代表者：榎田美雄）ほかによる研究成果の一部である。

（キーワード：高等教育改革、PBLチュートリアル、フィールドワーク、エスノメソドロジー）

Interaction analysis of higher education reform: An video-based-ethnography of practice-type-lessons for engineering

KASHIDA, Yoshio¹⁾, OKADA, Mitsuhiro²⁾, IGARASHI, Motoko³⁾, MIYAZAKI, Ayako⁴⁾, DEGUCHI, Hirofumi⁴⁾, MANABE, Rikutarō⁵⁾, FUJISAKI, Kazuhiko⁶⁾, KITAMURA, Takanori⁷⁾, TAKAYAMA, Tomoko⁸⁾, OHTA, Chikara⁹⁾, TAMAKI, Toshiaki¹⁾, TERASHIMA, Yoshiyasu¹⁾, ABE, Chieko¹⁰⁾, SHIMADA, Akihito⁵⁾, KOIZUMI, Hideki⁵⁾

(1) The University of Tokushima, (2) International Christian University, (3) Koryo International College, (4) Osaka Medical College, (5) University of Tokyo, (6) Gifu University, (7) Tokai University, (8) National Cancer Center, (9) Kobe University, (10) Ishikawa Prefectural Nursing University

(key words: Higher education reform, PBLtutorial, Fieldwork, Ethnomethodology)

I. はじめに—研究の狙い—

高等教育が変わりつつある⁽¹⁾。背景には、「大学のユニバーサル化」等の変化にともなう「学生の初期値の変化」と、「情報化社会の進展」等の社会の変化にともなう「大学教育の意味の変化」があるといえるだろう。すなわち、いまや大学は、エンターテインメント性と実践性を強く求める学生に対応しつつ、数年で陳腐化する「知識」ではなく、学び続ける専門職人生の数十年間にわたって有効であるよう

な「学習能力」をこそ与えるべき場所として、そのカリキュラムと教育技法を洗練すべき場所になってきている。この高等教育におけるイノベーション⁽²⁾は、我が国の大学教育を大きく変えつつある基本的なトレンドとなっている。けれども、教育方法の変化がどのような実際的な変化を学生と教場にもたらしているのかに関する実証研究は少ない。これまでの研究はたとえばPBLチュートリアルの導入年次学生のペーパーテストでの成績（たとえば、医師国家

試験合格率)を以前のそれと比較するものだったり、受講学生への調査紙法調査によって、学生の満足度を尋ねるものだったりしているが、そのほとんどが事後的、あるいは、間接的な評価になっている。これらの方法による調査では、教育の現場が実際にどう変わっていったのかについては情報が十分得られないだろうことは明らかであろう。では、教育の実際の状況の変化を知るような調査企画はどのように立てたらよいのだろうか。教育現場の状況をなるべくそこで起きている事柄に直接関わるような形で研究する手法が実践される必要があるだろう。

本研究は、このような要請に応えるために、企画された。すなわち、近年の「高等教育技法の革新」がどのような「学習現場の変容」をもたらしているのか、具体的には、どのような「教師-学生間」「学生-学生間」「学生-教材間」のコミュニケーションを生み出しているのか、というようなことを、エスノメソドロジー・会話分析を中心とした質的な研究手法を用いて明らかにしようとするものである⁽³⁾。

とりわけ、医学部における「PBL(プロブレム・ベースド・ラーニング)チュートリアル」と工学部における「フィールドワーク」に注目している点が本研究の特徴である。これらは現下の高等教育改革の主要潮流の一部をなしているものであるが、これらに関して以下のようなことを解明していきたいと考えている。

すなわち、まずひとつめの解明ポイントは、「自学自習」の態度を錬成するために海外から移入された「PBLチュートリアル」のような新しい教育技法が、語学試験対策時の協同翻訳づくりに典型として現れているような、「分担・助け合い型学習」を協同の実質としてきた日本の学生文化の下で、どのような換骨奪胎のされ方をしているのか、ということである。学友やチューターとの「協同」の微妙なありようが探求されることとなる。

ふたつめの解明ポイントは、「学習の実践性・総合性」を確保する観点から積極的になされるようになってきている、小集団による「フィールドワーク」が、実際にどのような学生の活動によって構成されているのか、ということである。「専門性を持って自主的にフィールドワークする現場」というものを、

学生がどんな道具を用いて、どんなコミュニケーションの中で、どのように相互行為しながら、編成していったのか、ということをあきらかにしていきたい。測定することや評価することの実践を通じて、専門というものを志向しつつ、同時に専門を構成していく学生の姿が発見されることとなる。これらの、大きく分けて2種の研究を通じて、教育改革下での学生の学習コミュニケーションの、現段階での実相を把握していきたいと思っている。我々の今回の研究のねらいを素描すると上記のようになるが、本稿では、このうち後半(都市工学実習の研究)の一部を扱うことにする。

II. 方法とフィールドの概要

(1) 方法としてのビデオエスノグラフィー

本研究の理論的・方法論的立場は、大きくいえば「質的調査」であり、少し詳しく言えば、「状況的学習理論」および「エスノメソドロジー・会話分析」ということになる⁽⁴⁾。

これらの立場では、探求すべき秩序は、現場の中で相互行為的に達成されている秩序として存在する。したがって、「方法」は特権化されない。すなわち、「方法」は、現場で秩序を理解し作り上げている相互行為当事者のさまざまな振る舞いを確認する方法であれば、原則的にどのようなものでもよい。とはいえ、我々の調査プロジェクトにおける「ビデオカメラによる撮影」と「撮影直後の教育担当者を交えたビデオセッション」の意義の大きさを考えると、あえてこの「方法」的特徴づけを用語化して、我々の研究を「**ビデオエスノグラフィー**」と呼ぶことは許されよう。すなわち、当事者の理解を実際の相互行為に基づいて経験的に確認するための道具として「ビデオカメラデータ」を用いることと、当事者参与の「ビデオセッション」を開催することによって研究に取り込まれる「エスノグラフィカルな知識」を存分に用いることの2点として、本研究プログラムの特徴は存在している。これらの特徴をもった研究スタイルこそ、上記の目的に適合的であると考えられたからである。この「方法」が功を奏すれば、(従来の研究と違って)「発見された秩序」が「現場」とレリバンズ(関連性)を持っている、と強く主張できることとなる。

この「方法」では、ビデオカメラは複数台用いられることが適切となる。また、ビデオデータは外付けポータブルハードディスクに MPEG 2 形式の動画像として蓄積されていくべきである。なぜならば、同時進行する場面内の多様なコミュニケーションを総合的にとらえなければならないから(=複数台ビデオカメラの必要性)であり、また、直後(場合によっては数日後)のビデオセッション時に簡便に再生ができなければならないから(=ポータブルハードディスクへの MPEG 2 レコーディングの必要性)である。

これらは、学生の学習というものが、学生の一身に、学生の状況から切り離された形で帰属するようなものではなく、学習環境の中で集団的に集積的に達成されているものである、という「状況的学習論」の立場から必要とされる条件であり、かつ、当事者の達成を十分なエスノグラフィックな知識を用いて追体験しなければならないという「エスノメソロジー・会話分析」の立場から必要とされる条件である。

総括的に言い直すならば、以下のようになろう。すなわち、新しい高等教育改革の手法がどのように達成されていっているかを確認するためには、実際にその教育が行われて学習が達成されている場面の研究、集団のなかで学生が学んだり評価されたりしている場面の直接的研究が必要であり、そのためには、良質なビデオデータと、十分な現場的知識が重要となる、ということである。

我々は、このような研究の企画をもって、2つの研究会(東京ビデオエスノグラフィー研究会と大阪ビデオエスノグラフィー研究会)を組織し、2006年から2007年にかけて3大学の7つの教育実践(医学部におけるPBLチュートリアル撮影が4回、工学部における都市工学演習=フィールドワークを含む=撮影が2回、総合科学部における家族社会学ワークショップ撮影が1回)をビデオ撮影した⁽⁵⁾。多くの場合、1場面を3台から4台のビデオカメラで撮影したが、調査者が少人数で機械設置が困難だったり、録画開始操作に失敗があったりした場合もあり、ビデオデータを撮れなかった調査もある(その場合は音声録音を分析に用いた)。総データ量は、すでに400GBを超えており、データの研究者間シェアリン

グに関しては、コピーデータを外付けハードディスクに入れて送付する形をとっている。以下ではこれらのうち、A大学の「PBLチュートリアル」については、ここに概要のみ記し、その分析の詳細は別稿(『年報筑波社会学』第19号に投稿中)に回すこととする。以下では、具体的には、B大学の「都市工学演習」を用いて、初歩的・例示的な分析を行うこととしよう。

(2) A大学医学部調査の概要

A大学医学部は戦前からの伝統を持つ地域の名門医学部⁽⁶⁾であり、医学科と付属看護専門学校を持っている。医学科のPBLチュートリアル⁽⁷⁾は、2年生末から4年生にかけて行われている。各学年の学生は100人が13班に分かれ、2週間から5週間でワンセットになったひとつのコースを同時に受けている。チュートリアルは月曜日、水曜日、金曜日の午前に各1時間程度行われている。チューター退出後にも1時間程度グループ学習の時間がとられている。午前10時半からあとには、講義の時間となっている。この大学のチュートリアルの特徴は「ハイ大方式」が積極的に取り入れられつつあることであり、その方向でのシナリオの見直しが進行中である。チューターの主流は、教員(医師)であるが、非医師の教員も担当することがある。学生には冒頭A4用紙で1~2枚の「シナリオ」が配布され、それに基づいて「事実」、「仮説」、「必要事項」、「学習項目」、の4項目がディスカッションのなかで確認されていく。これらの項目はホワイトボードにまとめられると同時に書記によって紙に書き留められ、次回のチュートリアルに引き継がれる。学生の評価は、①出席(遅刻は減点)、②発言状況等に関するチューターの毎回の評価、③提出された学生作成資料の評価、④コース終了時のペーパーテストの結果、を総合して行われている。

我々はこのチュートリアル授業を、2006年9月、2006年12月、2007年1月、2007年9月の4回撮影し、撮影直後のビデオセッションを含めて数十時間にわたって検討した。議論のなかでは、工学部調査との異同も話題とされた。具体的には、同様に学生の自主的学習に期待するものであるにもかかわらず、医学部PBLチュートリアルの学習課題が、既存

の知識・既知の能力に強く関連づけられているのに対し、工学部都市工学演習では、その学習課題は、新規の知識、及び、新規の都市計画的指標を作る構想力に強く関連づけられていることが話題となった。

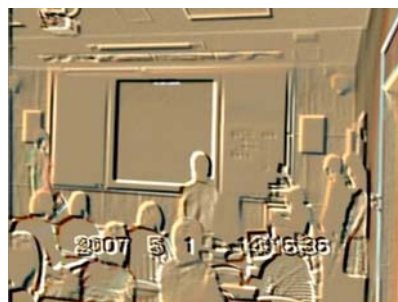
(3) B大学工学部調査の概要

B大学工学部は総合大学の工学部であり、工学部都市工学科の最初のフィールドワークは3年次春の都市工学演習(原則として火・木・金の午後、全11回~12回)から行われる。近年では、慣例として学科の新3年生(40人弱)を6つの班に分けての活動がなされている。各班は6~7人の学生で構成され、TAおよび若手教員が授業全体に9名ついているため、各班には都合1~2名ずつの教員が付き添うことになる。教員チームの内訳を職階別に表記すると、准教授3名、助教4名、TA(ティーチング・アシスタント)2名となるが、本調査においてはこれ以外にRA(リサーチ・アシスタント)3名からの助力が得られた。学習活動は、まず、全体ミーティングを大学で行った後、4日間の現地調査(各種典型地区の見学)を行い、地域の概要を把握する。その後で、5日目には班別ミーティングを大学で行い、自班に固有のフィールドを選択する。その後、自分達のフィールドに関して、班としての課題と個人としての課題を遂行していく。

2007年度に関して言うと、班の課題は「担当フィールドについて、そのフィールドの特徴を新しい指標を用いて表し、試験の日にプレゼンテーションすること」であった。個人の課題は、「街路空間の断面図と平面図を作成して試験の日に展示すること」であった。学生達は(実習室は24時間自由に使えるので、)授業時間以外に個人課題・グループ課題を進め、試験(ジュリーと呼ばれていた)での発表に備えていた。測定用の巻き尺等は貸与され、隣室のコンピューター室も自由に使える状態になっていた。我々はこの春の演習を2006年度および2007年度と2年連続してビデオ撮影し、ビデオセッションに授業担当教員の参加を得ながら、やはり数十時間をかけて分析を行った。



PBL チュートリアルの状況



都市工学演習ジュリーの状況
(匿名性確保のためエンボス加工済み)

Ⅲ. 高等教育改革の流れ(成人学習理論とアウトカム基盤型教育)とビデオ・エスノグラフィー

この節では、現在の高等教育改革の流れの中心的理念をなす、成人学習理論とアウトカム基盤型教育の概略を説明するとともに、そのような理念とビデオ・エスノグラフィーとの関係を検討する。

(1) 成人学習理論

成人学習理論は、実践的環境の中で、実践的問題を扱いながら、総合的問題解決能力を身につけるものである。これは、従来の学校教育がペダゴギー(子供に対する学習理論)的であったこと、すなわち、社会経験も学習の動機付けもない子供向きの知識詰め込み的な質を持っていたことに対し、大学教育の特徴を主張し、対比的意味合いで用いられる趣もあるが、さらに、情報爆発した専門家社会、知能社会化した生涯学習社会には、より適格的である、という、ペダゴギー批判の観点からも主張されている。

(2) アウトカム基盤型教育(プロダクト重視)

アウトカム基盤型教育とは、有意味で社会的合意のある少数の目標を立てその目標の達成度からのフィードバックを働かせながらカリキュラム体系を形成・運用していくことである。これは、従来の大学

教育が教育目標基盤型(プロセス重視、総合評価の困難、断片的・表面的達成問題)〔大西、2005a〕、〔大西、2005b〕であったことと対比的に主張されている。

(3) ビデオ・エスノグラフィー

我々のとる手法は、ビデオ・エスノグラフィーという手法であるが、この研究手法は、エスノメソドロジーに由来している。すなわち、我々の研究は、教育理念の妥当性を検討するものではないし、実践されているかどうかを吟味しようとするものではない。そのような関心を離れて(エスノメソドロジー的無関心)、何が起きているかを検討する態度をとっているのである。その態度を維持するための道具として、ビデオ・エスノグラフィーが使われることになる。この態度に基づく成果としては、たとえば、(Fujimori・Kashida・Okada・Terashima, 2007)がある。そこでは、OSCE(客観的構造的臨床能力試験)ですら、テストの適否という問題関心の外側で検討され、OSCEのためのOSCEという文化現象的側面があることが発見された(たとえば、診察的側面と同時に、テストとしての側面があり、SPの胸部に見て取れる発疹については、それに「発疹あり」と言及することも、言及しないで「異常なし」ということも許されていた)。たしかに、このような調査結果から、教訓をえること(たとえば、OSCEの設計においては、なるべく環境を実際の診察に近寄せて実践的環境化するのよ、という訳ではないだろう、という教訓をえること)は、不可能ではない。しかし、拙速な教訓取得よりはまずはなによりも、教育の現場で何が起きているか、を直接、明らかにすることから始めるべきだろう、と思っている。

このように発想したとき、すなわち、教育現場で実際に起きていることを、フィードバック(たとえば、調査紙法調査)によって、間接的に評価するのではなく、直接おきていることを確認しようとしたとき、ビデオが有力な探求道具になる。

そうすれば、たとえば、教師の期待通りに見えない振る舞いが学習者(集団)中に発見されたときに、それを「ヒドゥン・カリキュラム」と簡単にみなしてしまうことなしに、学習者の理解を、それ自身の権利において、ひとつの秩序現象として扱うことが

可能になるのではないだろうか。次節では、このような立場からの探究の試行的提示を、B大学都市工学演習に関して行うこととしよう。

IV. 都市工学演習のビデオ・エスノグラフィー

(1) B大学都市工学実習における α 班の活動

2006年、2007年ともに、B大学の都市工学演習の各班には、(新しい都市工学的な)「指標づくり」という課題が与えられていた⁽⁸⁾。我々が注目した班(α 班)では、一部メンバーが主張した「日陰度」という指標が構想されていたが、最終発表(ジュリー)では、むしろ「従来の暮らしやすさ指標では表現されてこなかった公園に面した住環境の過ごしやすさ」というものの存在証明にプレゼンの焦点が当てられることとなった。「S公園」という調査地点で実証するために現地調査の2回においても、この対立・葛藤の存在が観察された。具体的には、池の周回道路の交通量、交通スピード、坂道の斜度などとともに、街路樹の間隔なども調査されたが、それらは、新指標にまとめられるというよりは、「きらきら輝く湖面」そのものとして写真によってプレゼンされていた。

(2) α 班の実際の活動と最終プレゼンの齟齬：学習課題に忠実でありすぎた仮説の検討

問題は、これらの調査結果のほとんどは、具体的な指標の形にまとめられずに、演習最終日(2007年5月1日)の発表(ジュリー)では、「S公園」の状況そのものが主として語られたことである。つまり、 α 班の実際の班活動に存在した「指標化作業」と最終プレゼンの内容には齟齬があるのである。これはいったいどういうことだろうか、疑問に思われた。いまだ確定的なことは言えないが、このことを当該の教師集団のメンバーを含んだ我々の研究会で議論した結果は、以下のようなものだった。ここに仮説的に提示しておく。

すなわち、学生集団(α 班)は、学習課題にある面で忠実でありすぎたために、調査を発表時に指標化しなかったのではないかと、とも思われるのである。ストーリーは以下の通り。教師集団は、今回の都市工学実習の最初から「従来の都市工学では指標化されていないもの、語られていないものを扱うよう

に！」と強く促していた。この促しには、2種類の聴き方があり得る。ひとつは、「従来」(波下線)の方に重点がある指示としてこれをきく聴き方であり、もうひとつは、「not 指標化」の指示(実線下線)としてこれをきく聴き方である。他班の多くは、前者(波下線の強調的聴き方)を採用したのに対し、我々が分析対象としているα班では、後者(実線下線の強調的聴き方)をしたのではないか。じつは「従来指標化されていないものを探せ」という要求は、その理由を含めて考えるならば、「指標化が困難であるがゆえに指標化できていないもの」という要求とも取ることができ、α班の最終的な読解方向は、あながち間違いではない。むしろ、教師集団からの要求に、より根源的に対応しようとしたものであるともいえる。要求をそのようなものとして聴いたのならば、ジュリー(最終試験)におけるプレゼンにおいて、「指標化されがたいもの」の提示に集中すること、それゆえ、「風のそよぎ」「光のきらめき」等に示唆的に言及するような発表形態をとることは、むしろ「より課題適合的なもの」であることとなろう。教師集団がこのα班の発表に対し「指標化がなされていない」という非難・不満をのみ提示することは、α班からすれば、「要求の片側のみを、不当に強調した判定」あるいは「要求のうち、本質的な部分を判定に用いず、非本質的な部分のみを判定に用いた不当な判定」と聞こえた可能性がある(この点は、今後の分析課題である)。

しかし、事態は、上で示したような単純な事柄ではない。データ(α班については、その活動に寄り添いつつ撮影された数十時間の動画データと参与観察メモが存在する)によれば、α班の内部で、活動の当初から「指標化志向メンバー」と「心地よさ提示志向メンバー」との対立・葛藤があり、最終局面まで、この2つの方向性の組み合わせが班の実践活動に2面性をもたらしていたようにみえる。参与観察的証拠を1~2挙げておこう。

α班メンバーAは、活動当初から、「日陰率」という新・指標の可能性を主張していた。しかも、その提示においては、2回にわたって(教室内討論場面と、S公園内実地踏査場面)「建ぺい率⁽⁹⁾……日陰率」という発話の仕方をしており、非常に特徴的だった。

エスノメソドロジー・会話分析の王道はずれるが、見通しを得るために、若干解釈先行的にこの物言いの仕方を分析してみると以下になるだろう。

すなわち、班内に「心地よさ提示志向メンバー」が有力に存在することがわかっているため、A君は単純に「日陰率」ということができない。自分が主張する「日陰率」が正当なもの、班が取り組むべき活動の重要な主題であることを、より強く主張する必要がある。この必要が彼をして「建ぺい率」と言わしめたのだろう。すなわち、専門用語として確立している「建ぺい率」を“言い間違い”として前置することで、後続する「日陰率」も(一種の)専門用語たりうること、また、その意味づけも、「建ぺい率」類似のものであり得ること(心地よさに関する指標であり、土地の利用区分毎に特色的なものであり、……)を主張していたのであろう。

ところで、ここにもう一つ解かなければならない謎がある。かれはなぜ、言い間違い、の形でこの発話をしなければならなかったのだろうか。

データ提示の困難さからここでは十分な解明をすることができないが、一種のグループダイナミクスが働いているように思われる。場面の課題が、教室では「何を調べるか」、公園現場では、「ここで今何をするか」というものであるときに、「路線闘争」を直接喚起するような発言をすることは適切ではない、というような判断があったのではないだろうか。場面の中での発言の適切さがどのように達成されていたか、ということについては続けて考察をし、次の論文で詳細を発表していきたいと思っている。

(3) ジュリーでのα班発表の相互行為分析：「S公園地区の心地よさの相乗作用 vs. 要因分析」

以下の断片は、上記のような班内葛藤の結果なされたプレゼンのトランスクリプト(発話の書き起こし)である。上記で仮説的に提示した議論の一部がここで例証されよう。【★以下は榎田の補記】

断片1 ジュリーでのα班の最終プレゼン

(20070501_14:10:58~、PC1)

M井：(前略) [発表の最終場面]

注目して欲しいのは、家側の方、ここの部分です。

えっ、これ消えるんちゃうん。あー、そうか。えーと、ここの部分なんです、池側の通りと家側の通りを見比べてみると池側に負けないくらい、家側の方にもみどりが、道路沿いに、たくさん、植わっているやんか。これが重要です。そもそも、ここら辺にある地域っていうのは、なんやたっけ、第一種低層、第一種低層住居地域に指定されていて、これは、地区計画の中でも一番きびしい、えー、制限がかかっている地域です。ということで、低い家がたくさんある。

あるっていうことで、庭がたくさんあります。さらに、最低敷地面積も広く、設定されていることによって、えー、なんていうかなあー、GISで調べたのですが、一個一個の家の敷地面積に対する庭の割合が全体の7割、庭の割合が7割に達するというような、多く、えー、庭が設定されている状況があります。しかも、ただ、庭が広いっていうだけじゃなくて、これ、上が下なんですけども、ほとんどの家、道路沿いに面して南向きに家が面していることによって、南の方に、みんな、緑の庭をもちたいわけだから、道路沿いには、庭がたくさん、その、庭が多く、なんていうかな、設置されていることによって、結果的に、道路沿いの池側の方だけではなくて、家側にも、たくさん、緑が見えるということになってます。

はい。はい。〔★要因ごとの切れ目強調。トピックを切り替えている〕

で、風致地区といって、昔から、設定されている都市計画のひとつなんです、それらの効果によって、ただ、自然があるだけじゃなくて、建造物もうまく自然とマッチして、こちよい空間が生まれています。はい。〔★14:13:50 こちよ切れ目強調〕

さらに、家だけではなくて、建造物として、この道路も〇〇(※この部分聞き取り不能)うまく、自然と調和してくれています。まず、ひとつ、右上の写真を見て欲しいんですが、この歩道と池の間に柵がないやんか。このことによって、池と道路の間に、えー、へだたりがなくて、えー、池と道路をつないでくれているような、

柵がないことによって、ひとつ、さらに下の写真、2つ見て欲しいんですが、池の周りには、柳の木がたくさん植わっていることと、釣り人がいることによって、何か、こう、柳の木が広がっているやん。道路から出てきて、池側にも広がっているのと、釣り人が釣竿を伸ばしていることによって、道路と池がつながっているように見れるということに、さらに、この辺には、信号がひとつもなくて、で、街灯も切れてきていることによって、道路が街灯などの建造物も自然とうまくマッチしている。ということになります。はい。〔★3回目の強調 14:11

これらの要素によって、えー、最後は、人々がこの魅力にどンドンひきつけられて、通りに集まってきました。 14:12

散歩している人が多いんですが、散歩の人を中心にペット連れの人がいたりとか、子供連れの人がいたりとか、釣り人とか、ジョギングしている人がいる。このような人が集まることによって、より、心地よい空間が相乗効果で、この空間には、えー、あらわれてきます。

はい。これがそうです。まず、もともと、自然がたくさんある。うー、あれっ、いや、いや。もともと、自然が、この空間にたくさんあるっていうことと、さらに、その自然とマッチした建造物がある。で、その魅力にひきつけられた人々も、えー、散歩連れとか、子供連れの人々も多くて、よりゆったりした雰囲気はこの空間にかもし出している。

そのような相乗効果で、よりいっそう、こちよい空間が生まれてきます。

〔★都市計画学の用語によるものではないが、分析も論理もある。専門志向的ではある〕

はい。じゃあ。最後。まとめ。えー、この地域なんです、今、紹介したように、すごく、こちよい空間です。えー、で、まあ、こういった話を聞くと、将来、住みたいと思う人もいるかもしれませんが、この地域って、その、すごい高価な家が多くて、家1つ1つの値段が〇〇(※聞き取り不能)おそらくすごく高い。家を買って、人生で、最大の買い物であるわけだから、将来働くときには、豪華な家と、このよう

なこちよ場所に住めるようがんばって仕事してみてもいいんじゃないか。 14:13

はい。じゃあ、おしまい。

他：ははは

拍手

質疑応答時間(14:14~14:24)

K泉先生：A先生、どうですか。 14:14

A先生：あまりにも、こう、言葉が上手すぎて、思わず10万円の布団買いそうになってしまいました。

A田：ははは(笑い)

K泉先生：じゃあ、ぼくから。ぼくは、そうですね。あのう、僕が見るべき班だったんですが、なかなかね。海外出張とかね、そうですね、いろいろやろうと思ってたんだけど、ま、一言で言うと、えー、まあ、ちょっと、不十分だな、何が、何が不十分かっていうと、やっぱり、そのう、言葉で説明するんじゃないかって、言葉ってね、言葉って、その、この場で、言葉で説明するのではなくて、やっぱり、その、言葉で説明していることが、〇〇(※聞き取り不能)具体的に「あーそうなんだ」って、わかるような図面とか、指標化するとか、数値化してみるとか、そういう結果を示しながら、この地区の特性はこうですよっていうふうに説明するのが、まあ、今回の最初言った目的なわけだから。そういうことからみると、いろいろ、たとえば、この地区の魅力はこうですよ、たとえば、柳の木がある間隔で植わっていて、それも、地区によって、場所によって、こう、間隔が違っている。

14:16

それは、ある程度、そのことによって影がどうできているんですかっていう話になって、そうすると、影のでき方っていうのは、たとえば、何時、何月何日何時の時点では、こういう影ができていて、その影のでき方をもう少し、[★ここで、発表者のM井君は、影の写真を示そうとする。すなわち、K泉氏のいうような分析を終えたあとで、発表をしていること、K泉の指摘は未達成のことがらではなく、既達成の事柄であることを示そうとしている]分析してみると、たとえば、こういうような状

態がありますっていうのを君たちなりにちゃんと、記述する。

そういう部分が少したりないかな、と思ったけれど、どうですか。そういう風には、議論が進まなかったですか。他の班の人、どうですか。

H野：影とかだと、季節とか時間とかそういうものにすごく左右されるじゃないですか。そういうの、本当はすごい比較してやりたかったんですけど、〇〇(※聞き取り不能)だから、がんばって、特徴を出して、出せないところを言葉で補っていこうというふうに考えて。 14:17

K泉先生：でも、これね、影のでき方だって、影のでき方をこう、ちゃんと写真で撮ったりして、〇〇(※聞き取り不能)っていうことを、少し分析してみれば、わかったじゃない。

どうやったら、写真を見ながら、写真をみせるってことじゃなく、写真を見ながら、どういうパターンなのかが、割合、割合だけじゃなく、割合もあるかもしれない、パターンを、いろいろと写真を見れば、だけど、そういうことをもう少し追加できたらなって僕は思っています。

14:18

B先生：人々とね、なんか、自然と建物と、人々。人々に着目したのはいい[★学生同士が相談しはじめる：K泉氏の示唆がトリガーかも]ことだけど、せっかく、あそこに犬を散歩させている人の写真とか写っていたでしょう。いい空間というのは、わかるけど、じゃあ、どういう風に使われているとかね、どういうふうに、その空間がね、地元の人たちによって利用されているかっていうのを観察してみるとかさあ、あんまり、そういう感じじゃなかったの？あんまり、人がいなかったの？

M井：走っている人が多かった。

B先生：そう、

M井：散歩の人とかも。

K泉先生：そうなんですね。じゃあ、君たちそうだよ。いろいろ調べているのに、散歩している人がどのくらいいるとかいないとか、ジョギングしている人が何人いる、車の人がどれくらいいたとか、そういうのを調べてる？

B先生：だから、具体的にどういうところを使って

いて、地域の中で、あの空間がね、どんな役割果たしているかっていうのがみえてくるんじゃないかと思って。あそこだけを作ってね、あのう、ここちよい空間っていわれたら、そりゃそうでしょうと思っちゃうよね。だって、特別の空間だからね。 14:19

H野：〇〇(※聞き取り不能)

B先生：あー、そう。だから、説得力があるデータがないと、結論が生きてこないじゃない。だって、ここちよいってことが結論でさあ、言われても、それは、そう、もう、みればわかるよって。たとえば、車が少ない、車が行かなくてすむようなさあ、道路になっていると思うんだよね。だから、ちゃんと、その、池沿いが歩行者が中心になるような地域の形をしているわけでしょ。だから、すごくそれが活着しているから、ここちよいんだよね。あれが、車がバンバン通るようにね、道路ができていたらここちよくないと思うんだよね。そういうことを調べていくと、いろいろな理由の中で風のさざめきが聞こえるようなさあ、工夫がやられているわけ、風のさざめきが聞こえますってというだけじゃあ、テレビのレポーター的なみたい。

H野：風の音が聞こえます、列挙するくらいしかない

B先生：いやあ、その前に、そういう音が聞こえるっていうことは、他の人だったら、マイナス要因の通過交通があるとか、そういうのがない、そういうのがなくて、うまく計画されているわけでしょう、あの、道が。やっぱり、都市計画的にさあ、工夫されていると思うんだよね。そういうさあ、ことに目をつけないと、結果的にどういう現象が起こっているだけだったら、足りないんじゃない？

K泉先生：こういう状態です、それがどうして、こうなったか、単に、音なんかは、音を録ってきて、みんなに聞かせるとかしてみると、じゃあ、そうになっているのか、もう少し分析して。(以下略) 14:21

(4) α班の最終プレゼンにみる小集団活動の二重性

★の部分で短くコメントをしてきたが、このプレゼン内容は、教員集団から「パターンへの注目が無い」「分析がない」「調査が生かされていない」「都市計画(学)的でない」(大意)と評価された。たしかにそのようにも見える発表をα班はしている。

しかし、このように「低く」評価された発表こそは、α班がむしろ戦略的に作り上げたものである。それは、発表末の「はい」と「相乗的」を繰り返したかった発表の構造からもいえるし(繰り返し、からは意図性が読み取れる!)、M井君の途中の行動(写真を示そうとする活動)やH野君の「列挙するしかない」という発言からもみてとれることだろう。α班についての評価を上昇させるべきだ、という主張をしているわけではない。しかし、α班の発表作成プロセスについて、教員側の認識とα班側の認識にいかほどの「ずれ」があることは、そして、その「ずれ」については、α班内の相互行為ともども、さらに分析の余地があること、少なくともこれらのことは、たしかなようなのである。

V. まとめ

高等教育改革で導入されている新教育手法は多様であるが、概略的にいえば、「成人学習理論」に則った以下の3つの目標の共有を特徴としているといえよう。すなわち、①実践性の尊重(学習の動機付けを現場から得る)、②集団性の尊重(教師が教えるのではなく学生同士が助け合う)、③自主性の尊重(答えがあらかじめ与えられているのではなく、学生自身が創意工夫の中で見いだす)の3点である。

けれども、都市工学演習においては、①実践性は、教師の期待枠組みの自然な受容を困難にする側面も持っていたこと(例:想像以上にゆるやかな指標化、むしろ、要素還元主義的でないシステムの把握への学生の関心の移動)、②集団性は相互に助け合う形になるばかりではなく、片側(指標化志向のA君の作業は直接には発表には取り上げられなかった)の立場に基づく発表を生み出すような集団性であったこと、さいごに、③自主性も「自主的にチューターや学習の課題に寄り添っていく」という志向性が、教師の期待の形とは違う「自主性」にむかうものでありえたこと(一種の過同調ともいえよう)、これ

らが言えよう。

結果として、新教育方法は、そのプログラムがおそらくは公的には想定していないような内容の、「学習文化」(学習場面での学生の様式化された振る舞いと教員の様式化された振る舞い)を生み出すものであった。これらのことが、緊密な相互行為秩序のもとで達成されている現場として各授業場面をみていくことが、ビデオエスノグラフィーによって可能となった。詳細は次稿を期したい。

※本報告の一部は、まず、2007年9月6日にISCAR(国際文化活動研究学会)第1回国際アジア大会「活動、学習、人工物のフィールド研究とデザイン」(武蔵工業大学環境情報学部)において榎田ほか「実習型の授業のビデオ・エスノグラフィー(1)」として発表された。

さらに、2007年11月17日に、第80回日本社会学会大会(関東学院大学)の「一般研究報告(1)『会話分析とインタビュー調査(研究法・調査法(1))』」においてやはり榎田ほかとして、口頭報告された。

文献表

- Bateson, Gregory 1972 *Steps to an Ecology of Mind*, Chandler Publishing Company (New York)=1986/1987 佐伯泰樹・佐藤良明・高橋和久訳『精神の生態学(上)(下)』思索社。
- Cantillon, Peter Linda Hutchinson and Diana Wood (eds.) 2003 *ABC of Learning and Teaching in Medicine*, 2004 吉田一郎監訳『医学教育ABC—学び方, 教え方—』篠原出版新社。
- Fujimori・Kashida・Okada・Terashima 2007 “Examining Examinations” in 『徳島大学 社会科学研究所』第20号:57-73 (PDFファイルを公開中。)
<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/bulletin/pdf/socj20-4.pdf>。
- 五十嵐素子 2007 「教える/学ぶ<授業の会話>」前田 泰樹・水川喜文・岡田 光弘(編)『エスノメソドロジー—人びとの実践から学ぶ—』新曜社:175-180。
- 五十嵐素子・岡田光弘・榎田美雄・宮崎彩子・真鍋陸太郎・北村隆憲・阿部智恵子・小泉秀樹 2007 「実習型の授業のビデオ・エスノグラフィー

(2)」 in 『ISCAR 第1回国際アジア大会—活動、学習、人工物のフィールド研究とデザイン—』口頭報告(2007年9月6日 at 武蔵工業大学環境情報 学部:横浜)。

市川伸一・鎗木良夫編 2007 『教えて考えさせる授業 小学校—学力向上と理解深化をめざす指導プラン—』図書文化社。

伊藤英明・榎田美雄・尾崎史典・齋藤ゆみ・川路茂保 2008 「熟練技能中心設計によるイノベーションの創出」 in 『情報処理学会論文誌 (IPSJ Journal)』49-4:頁未定(掲載決定済)。

榎田美雄 2006 「弱者の抵抗」の非個人能力主義的解釈、『ソシオロジ』51-1:171-177。

榎田美雄・岡田光弘・五十嵐素子・宮崎彩子・出口寛文・真鍋陸太郎・藤崎和彦・北村隆憲・高山智子・太田能・玉置俊晃・寺嶋吉保・阿部智恵子・島田昭仁・小泉秀樹

2007 「実習型の授業のビデオ・エスノグラフィー(1) —「PBL チュートリアル」と「フィールドワーク」のビデオエスノグラフィーによる解明—」 in 『ISCAR (国際文化活動研究学会、International Society for Cultural and Activity Research) 第1回国際アジア大会—活動、学習、人工物のフィールド研究とデザイン—』口頭報告 (2007年9月6日 at 武蔵工業大学環境情報学部:横浜)。

黒川清監修,徳田安春・岸本暢将・Gordon M.Greene・齋藤中哉 2005 『ハワイ大学式 PBL マニュアル』羊土社。

Lave, J. & E. Wenger 1991 '*Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*', Cambridge University Press. =1993 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書。

前田泰樹・水川喜文・岡田光弘(編) 2007 『エスノメソドロジー—人びとの実践から学ぶ—』新曜社。

森田京子 2007 『子どもたちのアイデンティティ・ポリテックス—ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィー—』新曜社。

村中淑子 2006 「ネットを介さない集団語」『日本語学(特集 ネット社会の集団語)』25-10:36-47。

岡田光弘・五十嵐素子・榎田美雄・宮崎彩子・真鍋

陸太郎・北村隆憲・阿部智恵子・小泉秀樹 2007

「実習型の授業のビデオ・エスノグラフィー (3)」 in 『ISCAR 第1回国際アジア大会—活動、学習、人工物のフィールド研究とデザイン—』 口頭報告 (2007年9月6日 at 武蔵工業大学環境情報学部: 横浜)。

大西弘高 2005a『新医学教育学入門—教育学中心から学習者中心へ—』、医学書院。

大西弘高 2005b「研修カリキュラム開発」(日本家庭医療学会家庭医療後期研修プログラム構築のためのワークショップ=第1回=配付資料。2005年10月16日。)

※なお、下記に当日の講演のテープ起こし記録が存在している。

<http://jafm.org/edu/20051016b.html>

上野直樹&ソーヤー・りえこ(編)、2006『文化と状況的学習—実践、言語、人工物へのアクセスのデザイナー—』凡人社。

山崎敬一編、2004『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣。

吉田一郎・大西弘高編著 2004『実践PBL チュートリアルガイド』南山堂。

注

(1) 大きく言えば、成人学習理論に基づいた実践的・自発的学習プログラムへの変化が生じているように思われる。医学部のそれに関して具体的にいえば、7~8人の学生によるチューター付きの共同学習であるPBL チュートリアルの急速な普及(日本の80医学部中60以上の大学ですで行われているという)、学部4年終了時の共用試験OSCE (Objective Structured Clinical Examination:客観的構造化臨床能力試験、模擬患者等を用いた実技試験)の実施などがあげられよう。教育リソースの少なさ等の問題はあるものの、他の分野の学部学科においても同じ方向(少人数教育、実践志向、グループワークの活用等々)への改革が徐々に進行中である、というのが我々の認識である。[大西、2005a]

[Cantillon, Hutchinson and Wood (eds.) 2003, 訳

2004]等を参照せよ。なお、医学部医学科では、上記のような変化と並行して、教育成果の実践性の評価を実施して、フィードバックループを完成させようとする「アウトカム基盤型カリキュラム」への志向性も見て取れるが[大西、2005b]、こちらの流れは、他の分野ではいまだそれほど顕著ではない。

(2) 団塊の世代の大量退職という事態を受けて、生産現場においても、「社内教育のイノベーション」が強く求められている。すなわち、退職していく熟練技能者の暗黙知的技能をどのように社内に留め置くかという、短期的課題に対応するための社内教育におけるプログラム開発を、会社の組織全体を「知価社会」に対応した形に改革していくという中・長期的課題に対応するためのシステム変更にどのように接続していくか、という複合的課題が同時に達成されなければならないのである。その際には、熟練者個人に依存しない教育システムづくりを、熟練者の能力を切り縮めることによって達成するのではなく、むしろ熟練者の能力をより引き出す方向で作り上げていく、という方向が望ましいだろう。我々はこの課題に対応する方向での実践的研究の試みとして、乗用車の電動パワーステアリング制御ソフトの開発現場において、一方では「熟練技能の表象化(多次元尺度編成への置き換え)」を行いつつ、同時にもう一方では、「熟練技能を活用したソフト開発業務そのもののイノベーション(表象化されたツールを活用した新・作業システムの開発)」を実践しつつ観察する、積極的な参与観察を行った[伊藤・樫田ほか、2007]。伊藤が主導したこのプロジェクトにおいて我々は、製品開発現場に直接介入し、「『専門家によるデザイン』と『利用者による評価』」という、デザイナーと利用者を対置した非対称的な枠組みを破棄した。すなわち、「専門家によるデザイン」にのみイノベーションを割り当てる立場を放棄し、「デザイナーと利用者の双方の共同によるイノベーション」と

いう新しい理解の枠組みに従って、ソフト開発業務の流れの再編を行った(同時にその現場で、そのプロセスの記述をも行った)。対象は異なるものの、この考え方は、本論文での枠組み(「教員と学生の双方による教育方法イノベーションが現場でおきている」という考え方)につながっている。また、同様の立場は、より一般的な形ではあるが、五十嵐 [2007:179] によっても主張されている。

(3) 我々と同様の問題意識から教育現場の研究を進め、画期的な成果を得た例として [森田京子、2007] を挙げるができる。クラスが固定的で長期的観察が可能な場合には、彼女の方法の有効性は大きいだろう。しかし、氏の結論のどの部分がデータに依拠しているものであって、どの部分が推測に基づいたものなのかはいささか不分明となっている。

なお、「教育の実態」の解明は、教育の改善を直接に図ろうとする意図からも望まれている。その(成功)例として [市川・鎭木編 2007]。「実態の解明」といっても多様なレベルが存在することがわかる。

(4) これらのテキストとして [Lave&Wenger1991 訳 1993]、[上野直樹&ソーヤーりえこ(編)、2006] (ここまでが状況的学習論)、[山崎敬一編、2004] [前田泰樹・水川喜文・岡田光弘(編)、2007] (ここまでがエスノメソドロジー・会話分析)を参照せよ。

(5) 資金は上述のとおり、文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(B))「高等教育改革のコミュニケーション分析ー現場における文化変容の質的検討ー」(平成18年度~20年度、課題番号:18330105。研究代表者:榎田美雄)他を用いている。なお、この科研費は、内容的にもメンバー的にも平成17年度までの文科省科研費「医学教育のエスノメソドロジー」(基盤研究(B))を引き継いで行われている。その成果としては [Fujimori・Kashida・Okada・Terashima 2007] ほかを参照せよ。

(6) 調査対象者の匿名性保持のため固有名詞等に関

しては、分析に影響のない範囲で変更を加えてある場合がある。なお論文内データの処理に関して疑義がある研究者のかたには、守秘の誓約等をして頂いたうえでデータへのアクセスを認めることを検討している。

(7) PBL (Problem-based learning=問題基盤型学習)とは、「患者の事例の中から問題を見つけ出し、その問題をてがかりに、学習を進めてゆく学習方法」(吉田・大西編、2004:3)である。医学部では通常、少人数(5~8人)の学生集団がチューターの陪席のもとで、自主的に学習することを言う。なお、チュートリアルにおける「問題」が患者にとっての問題なのか、学習者にとっての問題なのか、チューターの陪席の仕方に関して、それは原則として傍観者なのか、介入者なのか、については議論がある。なお、ハワイ大式では、いささか介入の程度が高いことが期待されているようであった。

(8) これは、見方をかえれば、「新しい集団語の人工的創造プロセス」と見なすこともできるだろう。社会言語学の立場から、「集団語」研究における「ことば」概念を、語彙水準の特徴把握にとどまらずに「音声的特徴やパラ言語や非言語行動」まで含めることの可能性の豊かさを主張した論考としては [村中、2006] がある。

(9) 建ぺい率とは、敷地面積に対する建築面積の割合のことであり、都市計画では用途地域と対応させて建ぺい率が指定される。定義が示す通り建ぺい率は、集団的には、建物の密度、すなわち建て詰まり感を示す指標であり、ひろく言えば、心地よさを構成する指標の一つであるともいえよう。